報告Ⅱ　　スダン・シャキャ「ネパール仏教の現状と課題」

長谷川：　それでは続きまして、報告のⅡ、「ネパール仏教の現状と課題」と題しまして、本日は東北大学から来ていただきました日本学術振興会外国人特別研究員、スダン・シャキャ先生にご報告いただきます。お名前のとおり、シャキャ先生はネパールのご出身で、仏教徒でございます。

それではシャキャ先生、よろしくお願いいたします。

シャキャ：　ネパール出身のスダン・シャキャと申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

レジュメは一応８ページになっていますが、時間の関係で全ての内容に触れる時間がないかもしれませんが、ご理解よろしくお願いいたします。早速内容に入りたいと思いますが、私、人前でお話しすると少し緊張してしまいますので、出来るだけ私が準備してきました原稿を読みながらやっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

ネパールは２つの岩に挟まれた山芋であります。この名言は、ネパールの地理的な状況を表すものでもあります。この２つの岩というのはインドと中国の２つの国であります。そして、その２つの国に挟まれた山芋というのはネパールでございます。多くの民族はそれぞれの言語・文化を持っており、それを庭に例えて、同じく 18 世紀のプリトゥビ・ナラヤンという王が、「ネパールは４つの種族」、これはチャールヴァルナと言いますが、「４つの種族と 36 の民族によって構成されている華やかな庭園である」という名言を残しています。宗教は 2001 年の政府統計によりますと、ヒンドゥー教は 80%、仏教は 10%、その他、イスラム教やキリスト教などがあります。それ故に、当時はネパールの国教はヒンドゥー教でありました。2006 年に長年続いた王政が廃止され、それと共に世界唯一のヒンドゥー王国というネパールのアイデンティティも失われました。ヒンドゥー教、仏教問わず、宗教行事における王権の存在というのは非常に大きかったのでありますが、王政廃止と共にその役割は現在大統領が担うようになっております。政治的な変化は、ネパールの宗教や文化だけではなく、人々の意識にも大きな影響を与えていると言えます。現在のネパールは大きな変化の時代を迎えています。それでは、そのようなネパールにおける仏教はどのような状況でしょうか。それについて今回は現状を紹介し、その課題について触れていきたいと思います。

先ずネパール仏教の現状でありますが、ネパール仏教の現状に入る前に、釈尊生誕地ルンビニーについて若干触れていきたいと思います。レジュメの２ページに移っていきますが、伝説によれば、2500 年前にルンビニーにシッダールタ王子が生まれました。ルンビニーというのは現在ネパール領土内にありまして、インドの国境と接しております。ルンビニーには、先ほどの桂先生のお話にも出ました、アショーカ王が

建てられました石塔が存在します。その石塔の中には碑文がありまして、そこに「hide buddhe jāte sakyamunī（ここに釈迦牟尼が生まれました）」という文面が含まれています。1896 年にドイツ人の考古学者フューラーによってルンビニーが再発見されまして、ネパールは釈迦生誕地として広く知られるようになりました。現在は日本の建築家、丹下健三が設計しましたマスター・プランどおり整備が進み、園内には世界各宗の仏教寺院と共に研究施設も建てられています。

ネパールに現存する仏教とその共存についてですが、先ず７世紀に活躍しました玄奘三蔵はネパール、当時ネパールと言えばカトマンズ盆地を指すようでありますが、カトマンズ盆地までは辿り着かなかったようでありますが、玄奘三蔵が著しました『大唐西域記』では、ネパールについて述べられています。それによりますと、当時のネパールでは仏教が広く浸透しており、2,000 人以上の僧侶が大乗と小乗の両方を学習していました。当時のことがネパールの歴史においても黄金時代とされて、当時の王様、アンシュヴァルマーの娘であるブリクティーをチベットの王ソンツェンガンポが妃として迎えています。それと共に、チベットに仏教が導入されたと言われています。

冒頭でも述べましたように、今日では、仏教徒はネパールにおいて少数派であります。彼らの多くはシャーキャ、ヴァジュラーチャールヤ、ウダース、ターマン、セルパーと言ったカーストを持つ人々でありまして、カトマンズ盆地やその周辺、またヒマラヤの麓に住む人々であります。現在、ネパールの仏教は大きく分けて３つ存在します。一つは先ほども中村先生のご発表にもありましたようにテーラヴァーダ仏教、それからチベット系の仏教、３番目はネパールの伝統仏教であります。先ずネパールのテーラヴァーダ仏教について少し触れていきたいと思います。

ネパールのテーラヴァーダ仏教はミャンマー、タイ、スリランカなどから伝わった南伝仏教であります。ネパールにおけるテーラヴァーダ仏教の活動は 1930 年頃で、数人の僧侶達の出家から始まったようであります。彼らの多くはシャーキャ、ヴァジュラーチャールヤなど、元々ネパールの伝統仏教の担い手でありました。彼らはミャンマー、タイ、スリランカなどの大学または僧院でテーラヴァーダの仏教を学び、帰国してからネパールで仏教を広めたのであります。今日では、多くのパーリ仏典・ジャータカなどがネパール語、またはネワール語で翻訳されています。現在、このネパールにおけるこのテーラヴァーダ仏教というのは、親しみやすい仏教として民衆から広く支持を受けています。



図１　テーラヴァーダ仏教尼僧



図２　チベット仏教の系の僧侶



図３　経典読誦するネパール仏教の僧侶

次にチベット系の仏教でありますが、先ほども述べましたように、７世紀からネパールとチベットの間で仏教の交流が盛んでありました、古くよりインドからチベットへ渡る著明な学者達が、特にカトマンズ盆地の寺院に滞在し、チベットに入っていたようであります。レジュメ４に移りますが、ネパールにおけるチベット系の仏教、いわゆるチベット仏教は、元々ネパールの山岳地帯に暮らしているセルパー、ターマンなどの民族を中心に信仰されていましたが、これはいわゆるチベットから伝わった大乗仏教、または密教であります。チベット仏教は古くからカトマンズ盆地に住んでいるネワール人の間にも信仰されており、彼らの中からも僧侶または尼僧になる人がいます。特にウダースやダークワーという姓の人々はチベットとの貿易によって、チベット仏教を熱心に信仰されていました。そのためネパールには、今スクリーンに映っていますが、デーヴァナーガリー文字で書かれているチベット語の多くの写本が残されています。この写本に書かれている内容は全てチベット語でありますが、チベットを音写し、デーヴァナーガリーに書かれている形であります。その理由としては、当時のネパール人というのは、書くというよりも耳から聞いた学問をそのまま文字として写したという理由がその背景にあるようであります。これらの写本は個人蔵で、未公開のようなものがほとんどでありますが、今後ネパールとチベットの仏教交渉を明らかにする上で重要な資料になるであろうと思います。チベット仏教は現在、ネパールの仏教を支える一大勢力として発展しています。

次にネパールの伝統仏教でありますが、これはインド伝来の大乗仏教・密教を継承し、カトマンズ盆地のバハー、バヒーと言われている寺院を中心に広まったものであります。その担い手はカトマンズ盆地の原住民と言われているネワール語を母語とするネワール人であるため、ネワール仏教とも言われています。また、金剛乗（ヴァジュラヤーナ）とも言われていますが、この仏教は他の宗教の影響を受けながらも独自

の発展を遂げております。教義の柱は大乗仏教、仏教の教えでありますが、マンダラ、護摩、灌頂といった複雑な宗教儀礼も現在実践しております。経典、陀羅尼などは現地のネワール語の翻訳をすることなく、サンスクリット語のまま用いているのであります。更に般若経などの経典による功徳が民衆の間に広く浸透しているようで、そのためか膨大なサンスクリット写本が残されています。19 世紀初頭にイギリス外交官のホジソンがネパールに現存する写本を世界に紹介しました。それをもって、この写本はネパール仏教の発展に一役買っているとも言えます。更に仏教思想に基づいて造られた仏像、寺院、仏画はネパールの仏教美術を確立することにもなりました。このような観点から、ネパールの伝統仏教は最も古い伝統を受け継ぎながらも、ネパール固有の在り方で文化を形成していると言えます。故に、先行研究でもすでに示されていますように、ネパールの伝統仏教はネパールを代表するネパール仏教そのものであるとも言えます。ネパール仏教の伝統・文化・歴史、これらを解明することというのは、アジア仏教全体の歴史を解明するのにも繋がるのではないかと考えます。

以下では、ネパールの伝統仏教、すなわちネパール仏教の在り方、そしてその特徴について触れていきたいと思います。レジュメのページ５に移りたいと思います。

ネパール仏教の特徴の一つは、バハー、バヒーと言われる仏教寺院を中心とする組織的な仏教であります。このバハー、バヒーの形というのは、本学のこのキャンパスのところもバハー、バヒーを想定して作ったと聞きましたが、これとよく似た組織、形になっております。このバハーとバヒーという言葉というのも、vihāra という言葉から作られたネワール語であります。バハー、バヒーの建物は四角い庭を囲む２階または３階の建物がほとんどでありますが、これは現在カトマンズ盆地だけでも 400 を数えます。本尊はクァーバージュと言われ、ほとんど触地印の釈迦牟尼または阿閦如来であります。本発表では、「ゴールデン・テンプル」として知られているネパールを代表する寺院について紹介をしながら、ネパール仏教の特徴について触れていきたいと思います。

このレジュメの中にも平面図がありまして、そこに存在するお堂について詳しく書いていますが、この寺院の中庭には、仏塔、マンダラ台が置かれ、そしてこれを囲む形で１階には本堂、それから金剛薩埵堂、ナーマサンギーティ堂、ターラー堂など、多くのお堂が並んでおります。それから、このお寺の２階のところには阿弥陀堂がありますが、ここに安置されている阿弥陀は、このお寺の一番大きな寺院となっております。また、同じく２階にヨーガーンヴァラ、チャクラサンヴァラのような後期密教系のお堂も存在します。この寺院のもう一つの特徴と言ってもいいと思いますが、同じく２階にグンバー、チベット語の gom pa でありますが、グンバーと呼ばれる不空絹索堂もあります。ここではパドマサンヴァバなど、チベットの学僧の像も安置されています。また、このお堂の中には作法次第も全てチベット仏教に従います。これはネパール仏教とチベット仏教の共存のシンボルとも言えます。この寺院で唱えられている経典の中には、日本でも馴染みの深い『般若経』、『法華経』、『金光明経』、『無量寿経』などの大乗経典が含まれています。現在、これらの経典は常用経典として唱え

ることがないのでありますが、発願者がいればそれを唱えることになっています。その一方、朝夕の勤めには、ナーマサンギーティを始めとする普賢行願、十波羅蜜などの讃頌（stotra）、そして、無量寿陀羅尼、金剛薩埵百字真言などを唱えられています。また、ヨーガンヴァラなど後期密教のお堂では、後期密教の経典に従った作法が行われています。このように寺院の仏像、唱えられている経典に限って言えば、１つの寺院の中に上座仏教・大乗仏教・密教、全てが存在していると言えます。これがネパール仏教の一つの特徴でもあります。

次にネパール仏教に所属する者達について述べていきたいと思いますが、ネパール仏教の信仰者の多くはカトマンズ盆地に住むネワール人でありますが、代々決まったバハーやバヒーに属し、寺院の様々な行事に関っています。先ほども述べましたように、シャーキャ、ヴァジュラーチャールヤ、ウダース、ダークワーなどのカーストの人達がこの寺院のサンガ、仏教の組織、団体とも言いますが、このサンガに属します。このサンガに属するというのは、その寺院のメンバーになって、同時に仏弟子または仏教徒となるという意味を指します。サンガに属する際には通過儀礼がありますが、これはチュダーカルマ、また、ネワール語でバレ・チュエグと言いますが、いわゆる釈迦比丘になることを意味します。現在、ネパール仏教において僧侶となれる権利はヴァジュラーチャールヤのカーストのみに与えられていますが、それ以外の人々は檀徒、または信者としての役割を果すのであります。また両者共、ヴァジュラーチャールヤの僧侶も檀徒の信者達も両方、出家式という通過儀礼を通過しなければなりません。髪を剃り、黄色い、またはオレンジ色の僧衣を纏って出家し、戒律の下で比丘として４日間を生活をします。この４日の間に托鉢したりするのでありますが、４日間を終えますと、比丘の生活から再び在家の仏教徒として生活していくので、いわゆる還俗して普通の在家の人として生活していくのであります。こうしてこの通過儀礼を経て始めて、その人がサンガの一員になるということになり、真のネパール仏教の仏教徒として認められるのであります。一方、ヴァジュラーチャールヤ・カーストの場合は、彼らは僧侶階級の人であるため、アーチャー・ルイグ、いわゆる灌頂儀礼というまた別の通過儀礼を行います。

次に、レジュメの７ページに入りたいと思います。三種のマンダラと三尊形式について。仏教において三宝と言えば仏・法・僧を指しますが、三宝帰依は仏教徒としての出発点であると言えます。ネパール仏教においてインド伝来の大乗密教の多くは今日でも行われていますが、特にマンダラを使用する成就法はよく行われています。成就法の根本マンダラを描くことに先達って、三宝帰依を目的として三宝マンダラを描き、それを供養するのであります。では、この三宝マンダラというのは何でしょうか。

三宝マンダラは、仏マンダラ、法マンダラ、僧マンダラのことであります。ここでは、マンダラという言葉は「手段」または「グループ」という意味を指すのであります。

仏マンダラとしては、先ず八輻輪を描きます。その中央にはビルシャナを布置します。それから、このビルシャナを囲む形で、阿閦、宝生、阿弥陀、不空成就といった

八尊で中尊のビルシャナを囲むのであります。

いわゆる法マンダラというのは、ここでは九尊からなるグループであります。次に法マンダラの場合でありますが、これも仏マンダラと同じように八輻輪を用いるのであります。ここでは、法というのは九法、すなわち法華経を始めとする９つの経典群であります。また、法マンダラを描く場合、先ほどの八輻輪マンダラの中央に般若経を布置し、その中央の般若経を残りの８つの経典で囲むのであります。すなわち、法マンダラは般若経を筆頭とする９つの経典のグループであります。

僧マンダラも仏マンダラ、法マンダラと同様に八輻輪が先ず描かれますが、その中央に布置されるのが観音菩薩であります。そして、この観音菩薩を囲む形で弥勒、虚空蔵などの８人の菩薩がこの観音菩薩を囲んでマンダラを作るのであります。すなわち、僧マンダラというのは観音菩薩を筆頭とする９人の菩薩のグループであります。



図４　仏・法・僧を象徴する三尊形式

仏教パンテオンの中に三尊形式、釈迦三尊形式、または阿弥陀三尊形式は広く知られていますが、今回ご紹介する、この三尊形式というのはネパール独自で発展したもので、ネパール仏教の特徴でもあります。この三尊形式は、これまで述べてきました、仏・法・僧のマンダラに由来します。このマンダラ、この三尊は、それらマンダラの中央に布置されるビルシャナと般若経と、それから観音菩薩をそれぞれ図像化したものでありますが、すなわち中央にはビルシャナ仏、その両脇には般若菩薩と観音菩薩で構成されているのであります。中央のビルシャナ仏はしばしば他の尊格によって交代されることがありますが、般若菩薩と観音菩薩は定着しております。例えば中央のビルシャナの代りに釈迦牟尼、または阿閦を置いたり、また、ここでも見られますように、複数の手を持つ法界語自在尊を置いたり、また、ナーマサンギーティを置いたり、また、観音菩薩と般若菩薩の間に五仏を置いて、いわゆる七尊形式の仏像も存在するのであります。つまり、ネパール仏教にとっては仏、仏陀というのは釈迦牟尼だけに限らず、これまで述べてきましたように、五仏、金剛薩埵、法界語自在尊、ナーマサンギーティなどの尊格も含まれるのであります。同様にダルマ（法）というのは９つの経典の教えを指します。そして最後にサンガ（僧）でありますが、これは観音を始めとする、９人の菩薩のことを指すのであります。ネパールに現存する三種の仏

教はそれぞれ異なった歴史を持ち、今は新旧共に多くの寺院、僧院が全国に点在しています。その中で、ネパール仏教とはテーラヴァーダの僧侶の説法を聞き、一方チベット寺院を参拝し、出家式など通過儀礼をネパール仏教に従って行うことがあります。つまり、一人の仏教徒が三種の仏教を信仰することには違和感を持たないのであります。このように上座仏教・大乗仏教・密教、全てが共存していることがネパール仏教の現状であります。

最後にネパール仏教の課題について少し触れていきたいと思いますが、これまで述べてきましたように、ネパールにはサンスクリット語の膨大な仏教写本が残されています。それらの記録や保存が進んでいますが、未公開のものもたくさん残されております。今後それらを調査し、点在を確認し、明確にし、それを保存していくことも一つの課題となると思います。ネパールに現存する他の仏教に比べて、ネパール仏教は弱体化されていると最近指摘されています。テーラヴァーダやチベット仏教系の寺院は年々増えていますが、ネパール仏教の寺院はそれらの維持保存で精一杯であるようであります。では、その弱体化の原因は何でしょうか。

原因の一つは、伝統に固執していることであると思います。すでに紹介しましたように、ネパール仏教において僧侶は世襲制であります。同様に、檀家または檀徒も代々受け継がれることになっております。そのため、ある意味では檀家または檀徒も世襲制であると言えます。これは例外を除き、外の人はほとんど入れないということになります。つまり檀徒、また檀家の人口の減少というのは、そのままネパール仏教の弱体化を招いてしまうということになります。ただし、伝統に固執しているからこそ、インドから伝播した仏教がインドで滅んでしまっても、ネパールで存続しているということは特筆するべきことであると思います。

また別の要因は、思想と実践のバランスが取れてないという点が挙げられます。寺院の中で宗教行事に関する実践を勉強することはできますが、その実践を裏付ける思想、または哲学の勉強・研究をする機会というのは不足しております。そのため、古くから伝わっている資料というのも活かしきれていないのであります。

本発表で冒頭でも述べましたが、ネパールは今日、政治的に、また経済的にも急速な変化の時代を迎えています。このような社会において、ネパール仏教は今回取り上げました、いくつかの課題だけではなく、伝統を守る一方で新たな在り方が求められるのではないでしょうか。

以上で発表を終ります。ありがとうございました。（拍手）

長谷川：　スダン・シャキャ先生、どうもありがとうございました。「ネパール仏教の現状と課題」と題しまして、ネパールの仏教の歴史的な展開と伝統的なネパール仏教、それとチベット仏教、それと新興のテーラヴァーダとの関係についてもご報告いただきました。